

美濃・近江国境周辺の茶・薬草流通の変化

— 近世末期～近代の粕川筋産に着目して —

七 里 広 志

- I. はじめに
- II. 美濃・近江国境周辺の地域概観
- III. 近世粕川筋産の茶流通
 - (1) 近世美濃・近江国境周辺における茶の流通状況
 - (2) 北国脇往還藤川宿の茶流通の特殊性
 - (3) 近江湖北3郡で生産された茶の流通
- IV. 粕川筋産の薬草流通
 - (1) 近世末期から近代初頭における粕川筋産の薬草流通
 - (2) 近代における粕川筋産の薬草流通
- V. 近代以降における美濃・近江国境周辺の流通変遷と性格変化の要因

I. はじめに

近世から近代にかけての商品流通の地域的展開に関する研究は、流通システムを足がかりに追究を試みたものが多い。

中西は、流通史や経済史の視点から松前鯉の魚肥を取り上げて、市場構造の動態的分析を体系的に試みた¹⁾。問屋などの商人や廻船業者など、取引に関わった業者の史料を分析し、新しい参入者などの要因により流通の地域的展開をはじめとした市場構造が歴史的に変遷していく様子を整理した。

歴史地理学の立場から論じたものとして、古田は近世～近代の流通に関して魚肥を取り上げて、流通システムの地域的展開と地域構

造の分析を体系的に試みた²⁾。その中で、魚肥転換などの要因分析の際に、「生産地－流通拠点－消費地」という流通システムを一体として捉え、その上で関連する各地の地域構造を分析した。とくに魚肥問屋を流通拠点として、問屋を経由する魚肥流通について報告した。

こうした近世から近代にかけての流通システムの地域的展開と地域構造の変容に関する研究は、他にも塩³⁾、木綿⁴⁾、木材⁵⁾、味噌・溜⁶⁾、醤油⁷⁾や茶⁸⁾など、当時において重要視された商品作物や加工品について取り上げた報告が多い。歴史的史料に限りがあるという制約がある中で、多くは事例研究として流通組織や問屋などの商人の文書をもとにしている。中には、汽船の移出史料によって村からの流通記録に特化した報告もみられる⁹⁾。そして、流通組織や流通に関係する特権商人の活動、商品の生産地や消費地との取引による流通の地域的展開など流通システムの解明や、流通に関わる生産地、流通拠点、消費地の地域構造に関する視点が中心となって研究が進められている。

ここでは「生産地－流通拠点－消費地」という流通システムの中で、街道上の中継地の存在が捉えられにくい。中西や古田の報告は海上輸送による流通に関する史料が多く、他の研究においても取引記録による生産地と流通業者、流通業者と消費地を線で結ぶ分析が

キーワード：地域構造，中継地，茶流通，薬草流通，美濃・近江国境周辺

中心のため、流通途上の街道にある中継地に視点を置いて流通システムや地域構造を分析している報告は少ない。

街道上の中継地は、近世の陸上輸送において商品が継ぎ送りされるために生じる。そのため、商品流通がもたらす街道上の中継地の地域的特色や、他の地域との関連といった地域構造の変容を分析することで、より深く流通構造の展開を整理することができる。

本稿では、近世から近代において商品作物として生産され流通された茶や薬草について取り上げ、流通の中継地としての性格を持っていた美濃・近江国境周辺を対象として、地域構造の特殊性を捉える。

また、近代における交通の発達により流通システムが変わり、「中継地」としての対象地域の特徴の変容を捉えることで、地域構造の変遷を考察する。

亜熱帯性の樹木である茶は、積雪の多い対象地域において必ずしも好立地ではない。しかし、対象地域の近江の各村においては自給的に栽培されていたものが商品作物として取引されるようになった。美濃の粕川筋では山間部であるために米の生産が限られ、商品作物として栽培されていた。また、薬草は明確な採集や生産の始まりはわからないものの、近世後期にはもぐさを扱う出店が中山道や北国脇往還沿いにあり、対象地域の特産品となっていた。いずれも対象地域において重要な商品作物であり、史料の残存状況にもめぐまれている。

研究の方法として、まず、美濃・近江国境周辺地域に関する当時の茶流通の地域的展開を把握し、この地域が茶流通の中継地としてどのような性格を持っていたかを検討する。次に、美濃国粕川筋で生産された茶が美濃・近江国境周辺の茶流通と関連していった過程を考察する。そして、中継地としての特色が近代以降どのように変容したのか、また、その要因は何かを分析する。その際に、茶と同

じように商品作物として流通した薬草流通の例を交えて考察する。

そこで、茶については宿場の問屋に残されている取引記録を、薬草については薬草仲買人の取引記録を史料として、それぞれ分析した。

II. 美濃・近江国境周辺の地域概観

本稿では、近江国坂田郡（現米原市）から美濃国不破郡・揖斐郡（現関ヶ原町、揖斐川町春日）にかけての国境周辺地域を研究対象地域とする（図1）。この地域は、南北に伸びる山地が関ヶ原付近でとぎれるために、関ヶ原は美濃・近江国境周辺の街道が集まる交通の要衝となっている。その中でも、近世において日本の東西交通の幹線である中山道が通り、交通量は多く¹⁰⁾、付随していくつかの脇街道が発達していた。本稿で扱う地域に通るおもな街道は中山道、九里半街道、北国脇往還、長浜街道である¹¹⁾。

その中でも北国脇往還は、中山道の脇道として利用されており、美濃・近江国境周辺においては流通に大きな役割を果たしていたといえる。関ヶ原から木之本までの間に7宿が整備されていた。このうち、坂田郡の玉、藤川、浅井郡の伊部、郡上の4宿の規模は小さく（表1）、また、隣接する宿場との距離も短いために、片側のみの継ぎ送りとすることでその負担を軽減されていた。すなわち、隣接している玉宿と藤川宿の場合では、前者では上り（木之本方面）のみ、後者では下り（関ヶ原方面）のみの継ぎ送りがおこなわれていた。また、同じく伊部宿と郡上宿の場合も、前者では上り（木之本方面）のみ、後者では下り（関ヶ原方面）のみの継ぎ送りであった。

近世から近代において、近江と美濃との交流の経路はこの北国脇往還や中山道が幹線だったが、その他にも伊吹山の藤川峠や上平寺越の峠道は、本稿で扱う茶や薬草の流通に利用されていた。

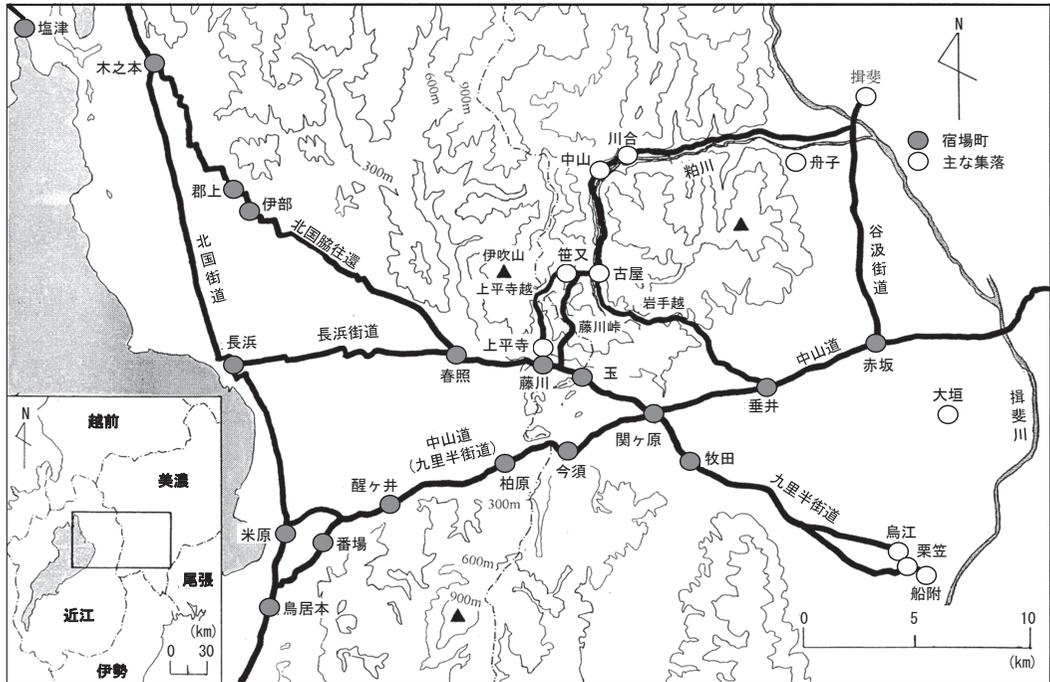


図1 美濃・近江国境周辺の地域概観図

表1 北国脇往還における各宿場の規模

宿場	木之本	郡上	伊部	春照	藤川	玉	関ヶ原
近世 (西暦)				寛永14年 (1637年)	天保14年 (1843年)	宝暦3年 (1753年)	天保13年 (1842年)
家数(軒)					125	100	351
人口(人)					600	352	1389
常備馬数(疋)				30	10		*50
近代 (西暦)	明治14年 (1881年)	明治14年 (1881年)	明治14年 (1881年)	明治14年 (1881年)	明治14年 (1881年)		
家数(軒)	290	68	109	172	135		
人口(人)	1031	261	280	774	627		

伊吹町史編さん委員会編『伊吹町史 通史編上』伊吹町, 1997, 523-525頁, 伊吹町史編さん委員会編『伊吹町史 通史編下』伊吹町, 1995, 717頁, 関ヶ原町編『関ヶ原町史 通史編下』関ヶ原町, 1993, 124-126頁, 193頁, 『滋賀県物産誌』滋賀県市町村沿革史編さん委員会編『滋賀県市町村沿革史 第5巻資料編一』滋賀県, 1962, 738頁, 754頁, 797-798頁, 864頁により作成。*延宝8(1680)年。

これらの峠道を利用して、美濃国揖斐郡の川合、中山、古屋、笹又(現揖斐川町春日)といった集落と近江との交流がさかに行われた¹²⁾。本稿ではこれら各集落を「粕川筋」とする(後掲図7参照)。これは各集落が粕川によって形成された谷に沿って発達してい

ること、近世の文書では粕川筋と呼ばれていたことによる。粕川筋の集落はいずれも山間に位置し、傾斜が急であり、水田は発達しなかった。そのため、近世は畑作を中心として農業経営を行っていた(表2)。また、急傾斜地であること、多雨地域であること、水

表2 粕川筋各村の概観(明治5(1872)年)

村名	田高 (石・斗)	畑高 (石・斗)	家数 (戸)	人口 (人)
滝村	5.1	5.8	14	82
檜村	1.6	9.7	18	78
池戸村	0.0	20.8	17	77
下ヶ流村	0.0	97.0	76	348
上ヶ流村	1.5	146.7	49	207
谷山村	0.0	21.1	17	99
香六村	0.0	77.4	26	130
小宮神村	0.0	55.1	59	304
川合村	0.0	126.3	76	384
中山村	0.0	161.3	40	193
古屋村	*			
笹又村	*			

〔明治5年村明細帳〕春日村史編集委員会編『春日村史 下巻』春日村, 1983, 10-11頁。また, 山村振興調査会編『西濃近郊山村のすがたと進路 ―急傾斜地の資源・産業開発を中心に―』山村振興調査会, 1974, 5頁により作成。*古屋, 笹又は資料欠。

はけの良いことなどから, 近世中頃から商品作物として茶生産がさかんに行われ, 出荷されていた¹³⁾。また, 伊吹山では古代から菓草が自生していた。近世から近代にかけて, 伊吹山の麓である粕川筋において, 菓草の採取と栽培がさかんに行われ, 他地域に流通されていた¹⁴⁾。

Ⅲ. 近世粕川筋産の茶流通

(1) 近世美濃・近江国境周辺における茶の流通状況

美濃国関ヶ原宿における問屋兵四郎以下6名による商品荷物の継ぎ送り記録をみると, 中山道, 北国脇往還や九里半街道を通じて, 商品が各方面に輸送されていた状況がうかがえる(図2)。この史料では, 茶荷物の取り扱いについての記録はないものの, 関ヶ原宿に関わる商人荷物の扱いや隣の宿場町へ継ぎ送る荷物の量, 荷物の生産地, 最終流通先などがわかり, 美濃・近江国境周辺地域に関わる荷物は, 美濃や尾張の東海地域と, 京や大坂, または越前や加賀といった北陸間との流通がみられる。

茶荷物に関しては, 北国脇往還と九里半街道の各宿場では, 商品を継ぎ送りする際に経路を選択するにあたって係争が生じていた。美濃・近江国境周辺の茶荷物流通からこの地域の中継地としての特色をみるためには, この係争をふまえておく必要がある。

近世において, 揖斐川を利用し, 九里半街道の起点, 船附・栗笠・烏江などで陸揚げされた商品は, 九里半街道から関ヶ原へと継ぎ送りされ, その先はおもに2種類の輸送形態がとられた。一方は引き続き九里半街道(中山道)を通して米原湊で湖上輸送に切りかえる経路である(以下「九里半街道側」「九里半街道経由」)。他方は関ヶ原から北国脇往還春照を経て長浜街道に入り, 長浜湊で湖上輸送に切りかえる経路である(以下「北国脇往還側」「北国脇往還経由」)。美濃国からの商品輸送経路はおもにこの二つに振り分けられていた¹⁵⁾。北国脇往還経由では, 九里半街道経由に比べて距離が短く, また継ぎ立て回数が少ないために輸送費が安く, 荷物の傷みが少なかった。さらに九里半街道のように公用優先で商品継ぎ送りを待たされることが少なかったこともあり, 経済的な点から商人には重宝されていた¹⁶⁾。

しかし, 五街道の一つである中山道と重なる九里半街道側の宿場では, 経営が圧迫されてくると商品継ぎ送りの正当性がたびたび主張され, 商品継ぎ送りによる利益を確保しようとする動きがあった。こうして, 北国脇往還と九里半街道の各宿場では, 商品を街道で継ぎ送りする際に, 経路を選択するにあたっての係争が生じた(表3)。係争は近世を通じて行われ, どちらか片方の主張がみとめられることが繰り返された。また, 例えば九里半街道側の北国脇往還経由の商品継ぎ送りはみとめられてはならないという主張が奉行所などに聞き入れられても, 輸送距離, 輸送力や運賃などの利点から商品は北国脇往還側からも送られるなど, 主張は無視されることが多

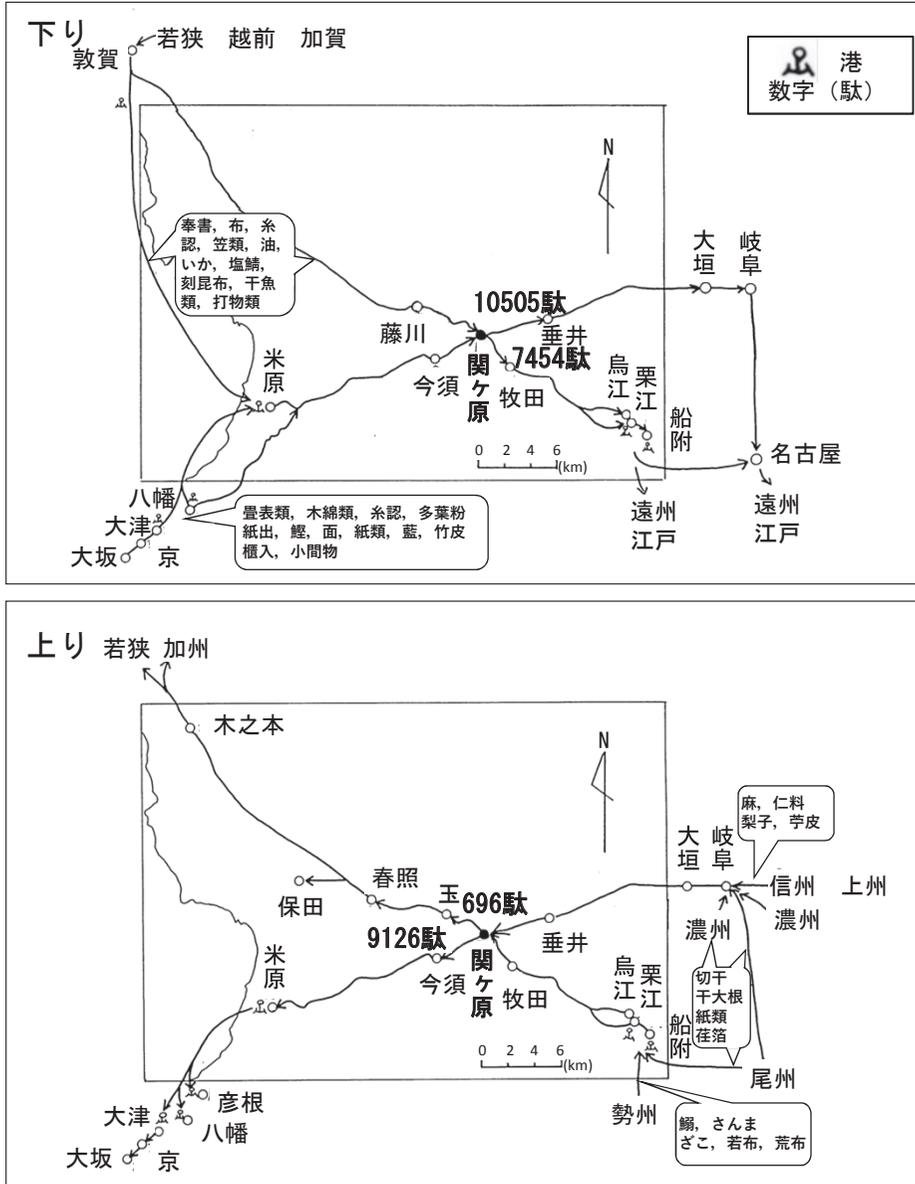


図2 関ヶ原宿を經由する商人荷物の流通の地域的展開 (天保14 (1843) 年)

それぞれ内枠は図1の対象地域に対応し、内枠の外は、流通の地域的展開を概念的に示す。「商人荷物口銭払い勘定上帳」(1843) 関ヶ原町編『関ヶ原町史 史料編三』関ヶ原町, 1978, 311-313頁より作成。

かった。さらに、奉行所などの公権力は双方の要求を聞き入れたために、係争は解決しなかった。この係争が近世を通して続いていたことから、美濃・近江国境周辺の流通にお

る地域構造は大きくは変わらなかったといえる¹⁷⁾。

この北国脇往還の商品輸送では、とりわけ米原・長浜方面への茶荷物が多数を占めてい

表3 近世における北国脇往還側と九里半街道側の係争

年 (西暦)	文書名	差出人	宛先	内容	係争の結果、主張が みとめられた宿場町
慶長11 (1606)年	関ヶ原問屋より證文之写	関ヶ原	柏原・今須	関ヶ原宿が北国脇往還に荷物を送らないことを約束	九里半街道側
延宝5 (1677)年	乍恐指上申口上書之事	玉	彦根奉行所	延宝5年の九里半街道3宿の訴訟は慣例に反する	北国脇往還側
享保10 (1725)年	茶荷物等出入吟味帳	玉	彦根奉行所	玉宿では茶荷物輸送の割合が高い また、北国脇往還経由の輸送を望む商人が多い	北国脇往還側
享保10 (1725)年	乍恐口上ヲ以奉申上候	春照・長浜・玉	竹中氏	享保10年の九里半街道4宿の訴訟は慣例に反し、無効	北国脇往還側
享保11 (1726)年	取替證文之事	今須・柏原・醒井	道中奉行	慶長11年證文で北国脇往還に荷物を送らないことを約束済み	九里半街道側
宝暦3 (1753)年	乍恐口上書ヲ以御願申上候	玉	彦根奉行所	茶荷物渋滞のため3分を北国脇往還経由で送る	北国脇往還側
宝暦3 (1753)年	口上書	春照	岩手奉行所	宝暦3年の取り決め以後茶荷物輸送が復活、諸荷物も送る	北国脇往還側
天明6 (1786)年	宿々集会示合証文之事	九里半街道各宿		下り荷物を長浜港へ付けない 関ヶ原宿は北国脇往還に新規荷物を送らない	九里半街道側
文政3 (1820)年	乍恐以書付奉御請申上候	関ヶ原	道中取締役人	今後北国脇往還方面へ荷物を送ることはないよう誓う	九里半街道側
文政13 (1830)年	乍恐申上候御上之覚	関ヶ原	道中取締役人	関ヶ原宿が北国脇往還方面への荷物輸送を止めることは不可能	北国脇往還側
天保9 (1838)年	高札	幕府	中山道各宿	北国脇往還への荷物は差し押さえ、道中奉行所へ申し立てる	九里半街道側
嘉永3 (1850)年	乍恐以書付願上候	今須・柏原・醒井	道中取締役	茶荷物渋滞のため3分は北国脇往還で送ってよい その他の荷物・時節は北国脇往還へ送ってはならない	九里半街道側
嘉永5 (1852)年	御勘定所より御達 関ヶ原宿諸事留書三五	勘定所	関ヶ原	天保年間の御高札を取り隠す者がいた 今回こそは北国脇往還に荷物を送らないこと	北国脇往還側

伊吹町史編さん委員会編『伊吹町史 通史編上』伊吹町、1997、573-586頁より作成。

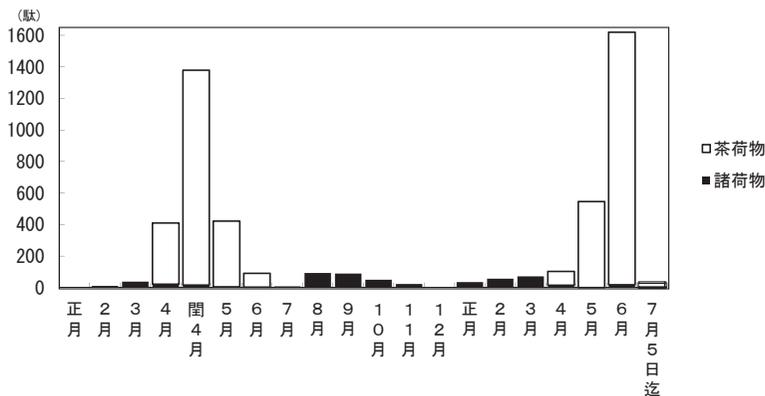


図3 玉宿の商品附け送り状況 (享保9(1724)～10年)

「茶荷物附送り出入吟味帳」(1725)、関ヶ原町編『関ヶ原町史 史料編三』関ヶ原町、1978、542-547頁より作成。

た。図3によると、美濃国北国脇往還玉宿における享保9(1724)～10年にかけての荷物輸送と茶荷物輸送の状況がわかる。ここでは、玉宿で継ぎ送りされた商品の大半は茶荷

物であり、それは旧暦4～6月に集中する季節的なものであった。

この茶荷物は美濃国武儀郡や加茂郡で生産された美濃茶が長良川、揖斐川の船運により

九里半街道の起点である船附、栗笠、烏江まで運ばれ、先述の経路をたどった¹⁸⁾。長浜(北国脇往還経由)・米原(九里半街道経由)～塩津・海津・大浦間を湖上輸送された後に敦賀へと陸上で運ばれ、秋田など東北、北陸方面で販売された。この流通の中で、春に加茂郡・武儀郡において茶摘みが行われてから、日本海が荒れる秋までに茶荷物を敦賀から出荷させなければならないという事情により、玉宿においては4～6月頃に継ぎ送りされたようだ¹⁹⁾。

先述した北国脇往還と九里半街道との各宿場で生じた商荷物継ぎ送りの係争も、多くは茶荷物に関するものであった。美濃・近江国境周辺の商荷物流通の状況は、係争を通して見る限り近世末期まで大勢は変わらなかったため、茶荷物流通による中継地としての地域構造も近世を通じておおよそ同じであったと考えられる。

このように、近世を通じて美濃・近江国境

周辺は美濃茶流通の中継地としての性格を持ち、そのために茶荷物の流通経路をめぐって係争が起こったと指摘することができる²⁰⁾。

(2) 北国脇往還藤川宿の茶流通の特殊性

近江国北国脇往還藤川宿は、天保14(1843)年には125軒600人の規模だった。それほど大規模な宿場ではない(表1)。

先述したように、藤川宿は宿場の規模が小さい上に玉宿と近接していることから、下り荷物のみが継ぎ送りされていた(図2)。そのため、ほとんどが上り荷物として流通される茶荷物が扱われることは考えられない。しかし、藤川宿の本陣や庄屋を務めた林家²¹⁾に「茶荷物出入覚帳」²²⁾という文書が残されている。これは本来あるはずのない茶荷物流通に関する記録である。これによると、文政5(1822)～7年における藤川宿の茶荷物売買先が明らかになる(図4)。

買入先についてみると、近世において茶生

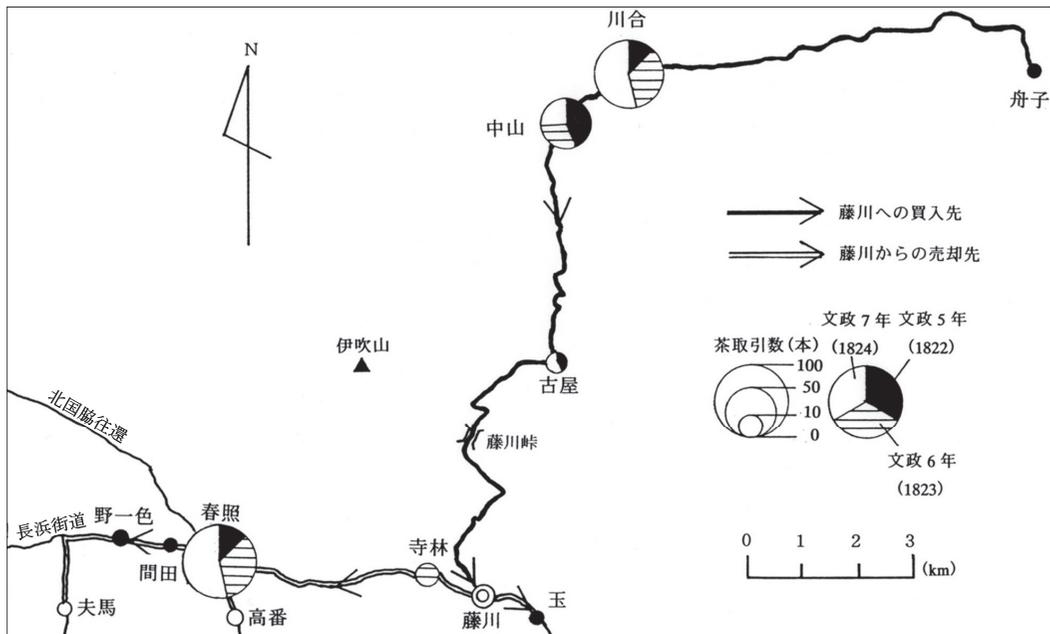


図4 藤川宿の茶荷物売買先(文政5(1822)～7年)

〔茶荷物出入覚帳〕林家文書(滋賀大学経済学部附属図書館所蔵)より作成。

産地であった中山、川合や古屋などの美濃国粕川筋各村が挙げられる²³⁾。このことについて、他の街道、例えば谷汲街道～赤坂～中山道～関ヶ原～北国脇往還という東回りルートを利用すれば、下り荷物しか扱わない藤川宿が茶流通に携わることはないという近世美濃・近江国境周辺の特色や、地理的な距離などから鑑みるに、これらの茶荷物は伊吹山藤川峠を利用して粕川筋から直接藤川宿に運ばれたものといえる。

売却先についてみると、藤川宿に隣接する宿場町である春照宿を中心に、街道沿いの各村が挙げられる。このうち、各村に対する小規模な売却はそれぞれの村で消費されたものと考えられる。しかし、『春日村史』によると、粕川筋上ヶ流村・下ヶ流村の名主や茶仲間買人と、越前国三国や鯖江の間屋との取引記録が残されており²⁴⁾、また、「茶荷物出入覚帳」²⁵⁾には春照宿から長浜湊、塩津湊までの運賃の記録もある。こうしたことから、春照宿に運ばれた茶荷物は、その一部は宿内で消費されたであろうが、多くはそのまま長浜～湖上輸送～塩津～陸上交通～越前方面へと継ぎ送られていたようだ。すなわち、粕川筋から北陸方面への茶荷物の流通経路の一部として藤川峠の経路が位置づけられ、藤川宿はその流通の一端を担っていたことになる。しかも、それは北国脇往還と九里半街道の宿場町間で係争があった美濃・近江国境周辺の流通とは、直接には関わらない経路として成り立っていたことは、注目してよいだろう。

このことから、美濃・近江国境周辺の流通について二つのことがいえる。第一は、粕川筋から伊吹山藤川峠を経て近江を通して北陸方面へと茶が継ぎ送られていたことにより、粕川筋産の茶流通についても、先述した武儀郡・美濃郡産の美濃茶同様、美濃・近江国境周辺は中継地としての特色を持っていたことである。第二は、その流通において、本来下り荷物しか扱わない藤川宿が、上り荷物

として運ばれる茶を扱っているが、この粕川筋から藤川峠を越えてくる流通は、北国脇往還と九里半街道の係争があった美濃・近江国境周辺の流通とは無関係に存在し、中継地に特殊性がみられることである。

(3) 近江湖北3郡で生産された茶の流通

図5は『滋賀県物産誌』²⁶⁾により作成した明治14(1881)年の坂田、東浅井、伊香の湖北3郡における茶生産状況を表したものである²⁷⁾。

まず、坂田郡における茶生産は、先述した藤川宿や春照宿のある北東部(伊吹山麓付近)において少なく、中部から北西部にかけての若干の集落でみられる。多くの集落では自給用として生産されていた²⁸⁾が、柏原や大野木、寺倉といった集落では、他の集落に対して製茶を売却していたようである。大野木や一色などでは長浜に向けての出荷がみられる。

次に、東浅井郡では、山本村をのぞく西部と東部においては少なく、中部の集落で多くみられる。坂田郡と同じように、多くの村落では自給用として生産されていたが、内保や大依、八島などでは長浜に対して売却している。

そして、伊香郡は、北部の山間部では生産がみられないものの、下余呉や木之本など中部から南部にかけてほぼ全ての村落で生産されている。そのうち、木之本からは越前・敦賀に向けて売却があり、越前と近江との交流をうかがわせる。

以上からいえるのは、次の三点である。第一に、湖北3郡における茶生産は全体的に自給を目的としたものが多かったことである。第二に、製茶が他集落に売却されている場合、売却先の多くは長浜であり、長浜の集荷性がうかがえることである。第三に、以上のような湖北3郡における茶生産と、先述の美濃茶や粕川筋産の茶の流通を重ねた場合、美

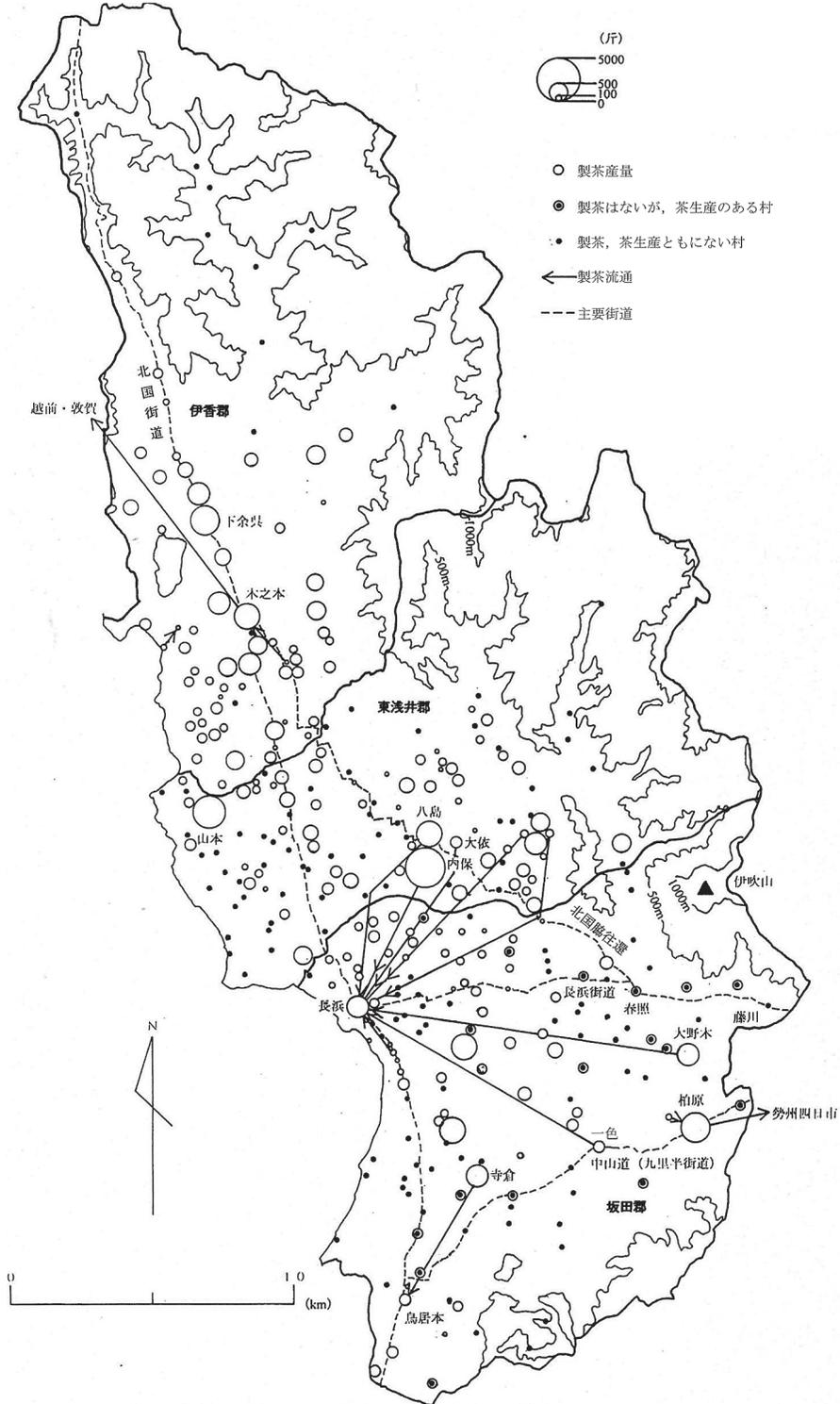


図5 湖北3郡における製茶の生産と流通(明治14(1881)年頃)

〔茶荷物出入覚帳〕林家文書(滋賀大学経済学部附属図書館所蔵)より作成。

濃国方面から長浜への流通は「東～西」の移動であり、湖北3郡のうち「東浅井郡・坂田郡～長浜」, 「伊香郡～越前・敦賀」の茶流通も「東～西」の移動である。すなわち、美濃国方面からの流通において中継地としての特色を持つこの湖北3郡であるが、若干生産される茶もその流通経路に乗っていたようである。

IV. 粕川筋産の薬草流通

(1) 近世末期から近代初頭における粕川筋産の薬草流通

これまでは、粕川筋産の茶流通を中心に、美濃・近江国境周辺における流通の中継地としての地域的特色について明らかにしてきた。しかし、近代以降の茶流通の変遷は史料などの残存状況により、実証するには限界があった。そこで、同じ粕川筋で生産され、他地域に出荷された薬草を事例として、近世末期以降の流通の変容を捉えることとする。薬草は粕川筋で生産され、他地域に販売されたところから茶と同じように商品作物として扱われたといえる。対象地域である美濃・近江国境周辺の薬草流通を考察することで、近世の茶流通において特色のあった地域構造がどのように変容したのかを捉える。

明治中期から昭和初期にかけて、粕川筋古屋には小寺甚五郎なる薬草仲買人がいた。この人物による行商の記録が「買入帳」, 「売上帳」として現存している²⁹⁾。また、小寺甚五郎の自伝にあたる『我一代記』³⁰⁾には粕川筋各村で採取された薬草を上平寺まで運び、そこから各地に行商したことが書かれている。よって、小寺甚五郎による薬草の行商記録を分析することは、近代における粕川筋産の薬草流通の一端を明らかにし、美濃・近江国境周辺地域の地域構造の変容を考察するために、貴重な資料となる。

図6は『我一代記』をもとに、小寺甚五郎の父、小寺寅蔵による薬草の行商経路を表し

たものである。本史料によると、寅蔵も薬草の行商を行っており、甚五郎は16～19歳まで父について行商に回り、19歳から一人で行商を行うようになった³¹⁾。甚五郎が19歳の時は明治18(1885)年であることを踏まえると、幕末から明治初期頃の流通先を示しているといえる。

父の行商経路について「京、大阪方面へ送り出し」と記しているが、それによると上平寺から「牛馬にて米原へ出、米原より舟にて大津へ上げ、大津より車馬にかけて京都行」などとある。このように、伊吹山上平寺越を利用して近江国上平寺へ出たのち、米原から船運で大津、京都、大阪へ行商した流通のほかに、米原、愛知川、八日市、八幡など湖東地方にいくつかの得意先があったようだ。これらはすべて粕川筋から西への流通であり、東への流通はみられない。また、上平寺からそのまま大津、京都、大阪へと運ばれていくことから、美濃・近江国境周辺は流通の中継地として機能しているといえる。このよう

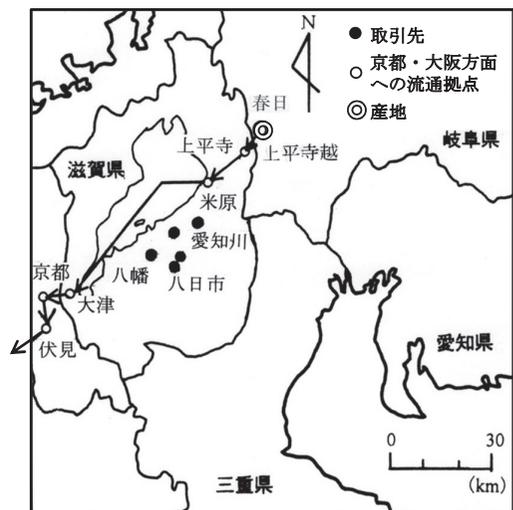


図6 薬草仲買人・小寺寅蔵による薬草行商経路(明治初期)

資料の制約により、県境・地名は現在のものとする。小寺甚五郎『我一代記』(春日森の文化博物館所蔵)より作成。

に、近世末期から近代初頭にかけての粕川筋産の葉草流通は、美濃から西への流通に限られ、美濃・近江国境周辺が流通の中継地として機能していることなどから、近世における粕川筋産の茶流通と同様の流通経路を示しているといえる。

(2) 近代における粕川筋産の葉草流通

小寺甚五郎の「買入帳」は明治26～大正11(1922)年にかけて断続的に11冊が残っており、葉草の集荷先について1軒ごとに集落名と人名、品目名、重さ、代金などが記されている。このうち、最も取引量の多かった明治31年の様子を示したものが図7である。これによると、中山を最多として古屋、笹又といった粕川筋の各集落から葉草の買入れが行われていた様子がうかがえる。

「売上帳」には、明治24年から大正12年にかけて断続的に12冊現存し、粕川筋で集めた葉草を各地へ出荷していた記録が記されている³²⁾。これは注文を受けた記録、出荷する際の記録、顧客ごとの販売の記録(図8)の3種類からなる。このうち、実際の取引記録である顧客ごとの販売の記録について、その取引量と取引先をまとめ、変遷を追ったものが図9である³³⁾。

明治24年の小寺甚五郎による葉草販売先をみると、愛知県は名古屋を最大として、一宮、稲沢といった3か所にやや大規模な取引がある。滋賀県へは栗東、八幡、彦根、長浜などを中心に、湖東・湖南地方に広く取引がみられる³⁴⁾。これは、先述した父寅蔵の得意先をそのまま引き継いだためと考えられる。他にも、京都や三重県の津、四日市、桑名などで若干の取引が認められる。

明治31年になると、全体的に取引量は増え、甚五郎の精力的な活動がうかがえる。愛知県は一宮が取引の中心となり、三重県への取引も増える。滋賀県では湖東地方を中心に引き続き多いのだが、彦根、長浜など湖北地

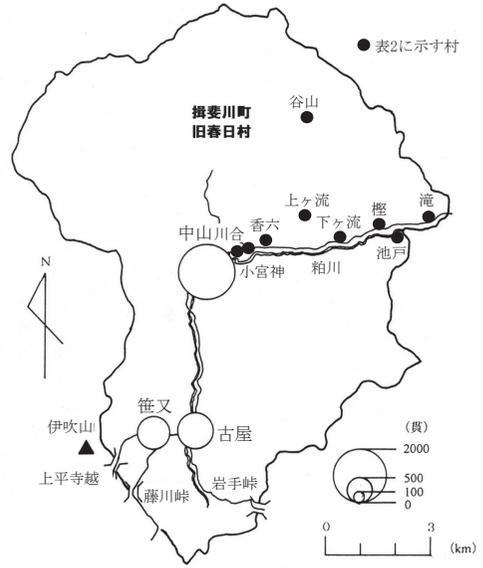


図7 葉草仲買人・小寺甚五郎の葉草買入先(明治31(1898)年)

小寺甚五郎「明治31年売上帳」(春日森の文化博物館所蔵)より作成。粕川筋の旧春日村(現揖斐川町春日地区)域を示す。

一宮	右正二受取候也	十月七日	此代金十一円五十銭	三十九貫百	正三	内三貫め引	〆四十二貫百	三本	記
土川様									

図8 小寺甚五郎の「売上帳」の例

小寺甚五郎「明治31年売上帳」(春日森の文化博物館所蔵)より作成。

方の取引が湖南地方に比べて増加している。

その後、明治44年、大正4年、9年にかけて、全体的に取引量が減少する。取引先も、滋賀県においては湖南地方、湖東地方の順に減少し、長浜を中心とした湖北地方の取引となっていく。湖南地方の取引が減少するにつれて、京都との取引もなくなっている。愛知県方面も全体として取引は減少し、一宮と津

島のみ取引となっていく。三重県方面も同じく取引の減少がみられ、松阪において若干の取引が認められる程度である。

このように、近代における粕川筋産の葉草売却先の変遷を追うと、次のようなことがいえる。一つは、近世末期から近代初頭にかけての父寅蔵の取引先ではみられなかった、一宮を中心とした愛知県方面との取引が認められたことである。それまでであった西への流通の他に、東への流通が新たに生じている。また、西への流通は京都や湖南地方が減少し、長浜を中心とした湖北地方との取引が中心となるなど、次第に流通の地域的展開は短距離となっていった。もう一つは、美濃・近江国境周辺、とりわけ近江側の湖北地方に着目した場合、寅蔵の時代は大津や京都方面への流通の中継地としての性格を持っていたが、近代になると、先述のように京都や湖南地方への流通が減少し、湖北地方が消費地として機能していくことである。このような粕川筋産の商品作物流通についての二つの変化は、先述の茶の例でもおおよそ明らかになっていたことである。

V. 近代以降における美濃・近江国境周辺の流通変遷と性格変化の要因

以上のような、近代以降における粕川筋産の商品流通の変遷と美濃・近江国境周辺の性格の変化を引き起こした要因は、以下のよう考えられる。

第一に、明治中期の鉄道の発達がある。葉草流通の場合、先述のように小寺寅蔵による行商が行われていた時代は、上平寺越により湖上輸送などを經由して近江・京都・大阪などと取引がされていた。しかし、小寺甚五郎の時代になると徐々に東海道本線が開業した。美濃・近江国境周辺における東海道本線は明治16年に長浜－関ヶ原間、明治17年に垂井－大垣間が開通したのを皮切りに、明治22年に長浜－関ヶ原間を米原－関ヶ原のルー

トに変更して全通している(図10)。その際、垂井駅前の運送店や、大垣市船町の廻船問屋から送られてきた運賃領収書などが残されている³⁵⁾ことから、小寺甚五郎は古屋から上平寺越を利用せず、岩手峠を越え関ヶ原や垂井から鉄道を利用して各地へ行商したようである。そのため、小寺甚五郎の取引先は概して鉄道沿線が多かった。一宮や名古屋、津島など東への取引が新たに行われたのは、鉄道による交通の利便性の向上が挙げられよう。併せて、このことは、近世にみられた街道による陸上交通に見られた「生産地－中継地－消費地」から流通システムそのものが変容したことも示している。

第二に、近代以降の道路の発達がある。近世までは粕川筋各村の道路は一間(1.8m)程度であり、物資の運搬は人の肩や背、牛の背などにより行われた³⁶⁾。そのため、粕川筋の各村は茶や葉草の流通のように、峠を越えて近隣地域と交流を持っていた。

しかし、明治27年以降、道路の整備が粕川下流地域である揖斐方面から順次行われ、昭和7(1932)年に揖斐－六合間にバスの運

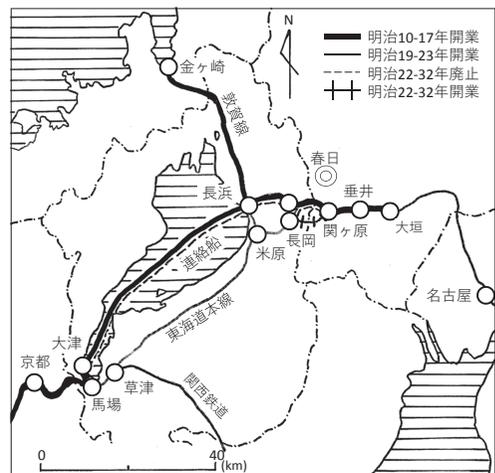


図10 滋賀県・岐阜県周辺の鉄道の発達(明治期)
資料の制約により、県境・地名は現在のものとする。小寺甚五郎「売上帳」(春日森の文化博物館所蔵)より作成。

行が開始され、昭和25年に揖斐－川合間に延長されるなど、揖斐方面とのつながりが強くなっていった。それと同時に、交通が整備されなかった峠道は次第に利用されなくなった³⁷⁾。聞き取り調査によると、上平寺越の場合、昭和10年頃は古屋の村人が上平寺の間屋に木炭を売りに来て、生活物資を調達して帰るなど交流がみられたが、戦後は次第に利用されなくなり、今では廃道になっている。

このように、交通の発達によって揖斐方面、すなわち東との関係が強まり、峠を越えての滋賀県方面との交流は弱まった。このことが、流通の地域的展開が西から東へ変化していった要因の一つといえる。

第三に、中京圏意識の形成と拡大が挙げられる。山本によると、近代における全国の流通についてみた場合、東京圏、中京圏、大阪圏の三つに集約できるが、このうち中京圏については近代になってからのもので、近世まで尾張は関東地廻り経済圏（東京圏・江戸）、美濃は大阪圏（大坂）であった³⁸⁾。すなわち、美濃国は近世まで大阪圏であり、西への流通は当然であって、美濃・近江国境周辺地域が流通において中継地として機能するのは必然的である。しかし、近代になって中京圏が形成されると、名古屋を中心とした東への流通がさかんになり、西への流通は減少したといえる。

以上のような要因により、粕川筋産の商品流通は、近世までの西への流通から近代以降の東への流通と変化したと考えられる。そして、西への流通が減少したことと流通システムが変容したことにより美濃・近江国境周辺は、中継地としての特色を失い、粕川筋と若干残った関係において消費地としての地域的特色が顕著となるように、地域構造が変わったものと考えられる。

図11にこれまで述べてきた結果と要因分析についてまとめた概念図を示す。本稿では、まず近世において美濃国粕川筋産の茶や

葉草といった商品作物が流通することにより、中継地となった美濃・近江国境周辺に与えた影響をみた。そして、宿場間での荷物の継ぎ送りが片道のみであったこと、その中で九里半街道側と北国脇往還側との宿場間で係争があったこと、さらに藤川宿では係争の中、片道のみ継ぎ送りでは扱われるはずのない茶が扱われていたが、それは粕川筋産のものが伊吹山の峠道を越えて運ばれる街道筋とは別の流通であったことなど、流通に関する地域構造の特殊性について述べた。

その上で、近代以降の流通の地域的展開の変容をたどり、流通と地域構造との関係をみた。その結果、西から東への流通の地域的展開の変容がみられるとともに、それに伴い美濃・近江国境周辺の中継地から消費地へと変化したことが明らかになった。また、そういった変化を引き起こした要因として、東海道本線に代表される鉄道や粕川筋各村における道路など交通の発達による流通システムの変容と、中京圏意識の形成・拡大を示した。従来、流通に関する研究において中継地の地域構造について分析する視点が欠けていた

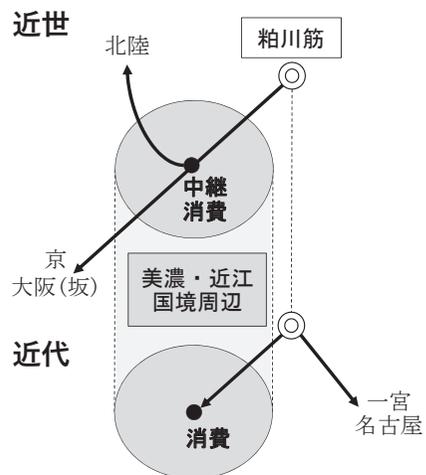


図11 近世末期以降の美濃・近江国境周辺における粕川筋産の茶・葉草流通と地域構造の変容（概念図）

が、本稿はその事例研究を試みたものである。

美濃・近江国境周辺を中継地とする茶流通は、本稿で主に扱った春日茶の他にも、先述のように武儀郡・加茂郡で生産された美濃茶や伊勢茶など他の事例もみられる。美濃・近江国境周辺において、このような他地域からの流通や、また茶・薬草以外の他商品の事例、さらには国見峠³⁰⁾など他の峠道を利用した流通などについて分析を深め、幅広い視野で流通を捉えることは、対象地域の地域構造をさらに明確にしていく点で不可欠である。この点については今後の課題としたい。

(滋賀大学教育学部附属中学校)

〔付記〕

資料調査に際して、春日森の文化博物館、滋賀大学経済学部附属史料館、旧伊吹町固定資産課の皆様には所蔵資料の閲覧で大変お世話になった。

本稿の骨子は、2000年に立命館大学文学部地理学科に提出した卒業論文である。当時、立命館大学の河原典史教授にご指導いただいた。また、本校の作成にあたって、滋賀大学教育学部の松田隆典教授にご助言いただいた。

〔注〕

- 1) 中西 聡『近世・近代日本の市場構造—「松前鱈」肥料取引の研究』東京大学出版会、1998。
- 2) 古田悦造『近世魚肥流通の地域的展開』古今書院、1996。
- 3) 柳平千彦「富士川通船と商品流通—高島藩領の御廻り船移出と塩の流通を中心として—」信濃37-11、1985、85-98頁。
- 4) 岩崎公弥「近世西三河地域における木綿流通の地域的展開」歴史地理学紀要26、1984、15-32頁。岡田光代「泉州における木綿の流通過程—文久元～三年の流通争論を中心に—」ヒストリア105、1984、109-121頁。
- 5) 山下琢巳「天竜川における流出材木の流通と下流域沿岸住民の対応」歴史地理学46-2、2004、25-44頁。
- 6) 柳川貴弘「幕末・明治期の尾張国知多郡における味噌・溜の生産と流通」愛知教育大学地理学報告81、1995、18-37頁。
- 7) 高木 亨「第二次世界大戦前の金沢市大野町における醤油産地の展開過程」歴史地理学48-2、2006、1-18頁。
- 8) 中嶋則夫「猿島台地における茶業の展開とその存立条件」地理学評論67A-4、1994、257-277頁。
- 9) 清水克志「汽船による流通記録からみた沿岸集落の近代—三浦半島松輪村を例として—」歴史地理学60-1、2018、19-37頁。
- 10) 土田良一「江戸時代における街道交通量」歴史地理学117、1982、26-36頁。
- 11) 本稿で扱う街道は以下の通りである。中山道(江戸日本橋～岐阜方面～赤坂～関ヶ原～鳥居本～草津、現在の国道8～21号に相当)、江戸幕府によって整備された五街道の一つ。九里半街道(船附・栗笠・鳥江～関ヶ原～番場～米原、県道30～56～国道365～21号に相当)、関ヶ原から番場までは中山道と重なる。なお、近江国にある同名の街道(今津～若狭国小浜、国道303～27号に相当)とは別の街道である。北国脇往還(北国海道)(関ヶ原～春照～木之本、国道365号に相当)、近世ではおもに「北国海道」とされていたようだが、現代では一般的に「北国脇往還」と呼ばれている。別に北国街道(鳥居本～長浜～木之本～北陸方面、国道8号に相当)があり、「北国海道」とは別の街道であるが、混同を避けるため本稿では「北国海道」を「北国脇往還」と称する。長浜街道(朽木街道)(春照～長浜、県道509号に相当)。伊吹町史編さん委員会編『伊吹町史 通史編上』伊吹町、1997、515-516頁。
- 12) 春日村史編集委員会編『春日村史 上巻』春日村、1983、560頁。
- 13) 前掲12) 401-402頁。
- 14) 春日村史編集委員会編『春日村史 下巻』春日村、1983、81-82頁。また、近江の中山道柏原宿では伊吹もぐさを街道名物として広く販売していた。全盛期には10軒を越える店が軒を並べていたが、なかでも亀屋左京の店舗は安藤広重の「木曾街道六十九次」の柏原にも描かれている(淡海文化を育て

- る会編『近江歴史回廊 近江中山道』サンライズ出版, 1998, 220-222頁)。
- 15) 前掲11) 574頁。
 - 16) 前掲11) 575頁。
 - 17) このような本街道と脇道の商荷物輸送に関する係争の事例として、尾張・美濃国の木曾街道(藩営街道)と下街道や、信濃国佐久地方の中山道と周辺峠道などが報告されている。桜井芳昭「藩営街道と脇往還の関係について—木曾街道と下街道の場合—」愛知学芸大学地理学報告47, 1978, 32-39頁。中島明「上信交通の農民的展開—百姓一揆の通った峠道—」信濃36-3, 1984, 53-64頁。
 - 18) 畠清次「江戸時代における茶の生産と流通に関する一考察(抄)—敦賀港から船積みされた茶—」日本海地誌調査研究会編『高燈籠』日本海地誌調査研究会, 1999, 291-371頁。
 - 19) 青木秀樹「尾張藩奥州茶方支配人の活動と美濃茶の発達—文化〜天保年間の生産と流通をめぐって—」上越社会研究7, 1992, 25-34頁。
 - 20) 伊勢茶も美濃・近江国境周辺を中継地として北陸方面への流通があったようだ。辻原登『創業者は七代目』毎日新聞社, 1995, 10頁。
 - 21) 旧伊吹町役場所蔵の土地台帳から、時代は下るが明治20年の藤川宿における家屋数がわかる。それによると、全家屋数104のうち、林兵左が所有している家屋は29, 林周五郎が所有している家屋は22, その他が53となっている。また、家屋図によると林兵左は本陣・問屋場を、林周五郎は庄屋の家屋を所有している。
 - 22) 滋賀大学経済学部附属史料館所蔵。
 - 23) 前掲12) 401-418頁。
 - 24) 前掲12) 410-417頁。
 - 25) 前掲22)。
 - 26) 滋賀県市町村沿革史編さん委員会編『滋賀県市町村沿革史第5巻 資料編一』滋賀県, 1962。
 - 27) 先述した北国脇往還や長浜街道、中山道はこの3郡を通る。『滋賀県物産誌』(前掲26)は明治期に刊行された統計書であるが、近世には広域にわたって数量的な取り扱いのできる史料がみあらず、近世の後期や末期に関して産業の実態を把握するための史料として利用すれば、この地域における近世の茶荷物生産をある程度明らかにできると浮田は述べている。浮田典良「明治前期滋賀県における農業と農産物流通—『滋賀県物産誌』による町村別検討—」人文地理37-4, 1985, 1-21頁。
 - 28) 前掲26)によれば、売却先の記されていない集落の多くは茶について「総テ各自ノ飲料ニ製ス」などと記述があり、集落によっては茶が自給の目的で生産されていたことがうかがえる。
 - 29) 高木朋美・田中俊弘「春日村における薬草仲買人・小寺甚五郎の記録(第1報)—買入帳と売上帳—」薬史学雑誌31-2, 1996, 200-203頁。
 - 30) 春日森の文化博物館所蔵, 1928。
 - 31) 高木朋美・田中俊弘「春日村における薬草仲買人・小寺甚五郎の記録(第3報)—「売上帳」にみられる薬草取引量と売上高および品目—」薬史学雑誌32-2, 1997, 165-168頁。
 - 32) 「売上帳」については、高木朋美・田中俊弘「春日村における薬草仲買人・小寺甚五郎の記録(第2報)—「売上帳」に記載された地名の考察—」薬史学雑誌32-2, 1997, 159-164頁において詳しく分析されている。
 - 33) 顧客ごと販売の記録は図8のように一件ごとに記載され、取引量、値引き量、代金、代金受け取りの有無、日付、地区名、顧客名などが書き込まれている。このうち、図9では取引量と取引先をまとめた。ここでは、相場が変動することをふまえ取引額は扱わなかった。また、取引先の地名は記されていないものもあり、日付から高木らによる分析と照らし合わせて確定したものもある。このため、地名は高木らに従い現市町村名に修正して集計した。
 - 34) ここで取り引きされた薬草の品目は、大半が「甘茶」か「百草」なのだが、滋賀県の一部では「当帰」や「川芎」などの薬草が

取り引きされていた。これら1貫あたりの値段は、「川芎」で「甘茶」の4～5倍程度、「当歸」は同じく2倍程度である。よって、「当歸」や「川芎」は高価な薬草とみなすことができる。小寺甚五郎はこれらの高価な薬草について、滋賀県における一部の得意先のみを取引対象としていた。甚五郎がいかに滋賀県方面との取引を重要視していたかがうかがえる。前掲31)。

35) 春日森の文化博物館所蔵。

36) 前掲14) 295頁。

37) 前掲14) 292-337頁。

38) 山本耕三「大正・昭和初期の名古屋における物資の移出入について」地理科学48-2, 1993, 59-67頁。ここで山本は、近代以降の中京圏の存在や形成過程、その大正期と昭和初期の変化について分析しているが、中京圏が成立した理由までは追究していない。

39) 岐阜県揖斐川町春日美束と滋賀県米原市板並を結ぶ伊吹山の峠道。